小学校

平　成　15　年　度

教育研究員研究報告書

特　別　活　動

東京都教職員研修センター

平成１５年度　教育研究員名簿（小学校　特別活動）

分科会	区市町村名	学　校　名	氏　　名
低学年分科会	品川	立会小学校	中西　千恵
	杉並	杉並第五小学校	髙松　由貴
	板橋	舟渡小学校	○三浦　忠夫
	練馬	練馬小学校	伍堂　祐子
	足立	千寿常東小学校	小芝　敬子
	八王子	館小学校	磯田　洋子
	府中	住吉小学校	谷口　加寿子
中学年分科会	新宿	天神小学校	田中　竹士
	北	浮間小学校	内藤　真裕美
	町田	小山田小学校	○新沼　聡
	国立	国立第六小学校	山森　千絵
	清瀬	清瀬小学校	大久保　邦子
高学年分科会	江東	東砂小学校	寺田　美弥
	大田	開桜小学校	森　賢一郎
	世田谷	八幡山小学校	○山久保　正治
	世田谷	千歳台小学校	中嶋　健彦
	葛飾	松上小学校	松本　ひろ子
	江戸川	篠崎第五小学校	川上　ひろみ
	東大和	第六小学校	藤井　正昭
	あきる野	屋城小学校	◎谷澤　公子

◎　全体世話人　　○　世話人

（担当）　東京都教職員研修センター　指導主事　加納　一好

目　　次

Ⅰ　研究の全体構想

1　主題設定の理由 ---------- 2

2　研究の進め方 2

3　児童の実態 2

4　研究構想図 4

Ⅱ　低学年分科会 ---------- 6

1　主題設定の理由 6

2　研究構想図 7

3　研究の内容 8

4　研究の成果と課題 １１

Ⅲ　中学年分科会 ---------- １２

1　主題設定の理由 １２

2　研究構想図 １３

3　研究の内容 １４

4　成果と課題 １７

Ⅳ　高学年分科会 ---------- １８

1　主題設定の理由 １８

2　研究構想図 １９

3　研究の内容 ２０

4　成果と課題 ２３

Ⅴ　研究の成果と今後の課題 ---------- ２４

Ⅰ　研究の全体構想

１　主題設定の理由

望ましい集団活動を通して、豊かな学校生活を創造する子どもの育成
～評価の工夫と活用を通して～

「学級活動は楽しいですか。」と問いかけると、ほとんどの児童は、「楽しい」と答える。その理由を尋ねると、どの学年においても、「発表できたから」「司会になったから」など、集団の中で、自分を表現できたことへの喜びをあげる児童が多い。また、「先生や友達にほめられたから」「自分の意見に賛成してもらえたから」など、まわりに受け入れられたことを理由にあげる児童もいる。

少子化や核家族化などの社会環境の変化により、人間関係が希薄になった現代社会において、学校教育の担う役割は大きく、また、その在り方が問われている。今回の学習指導要領においても、特別活動の改訂の趣旨として「集団活動を通した教育活動としての特質を生かし、集団の一員としての自覚を一層深め、豊かな人間性や社会性の育成を図る。」と述べられている。

そこで、本部会では、学級活動「（１）学級や学校の生活の充実と向上に関すること」における児童間の認め合いに焦点を当てた。児童が、自分のよさや友達のよさを見付け、かかわり合い、認め合うことで、望ましい集団活動が展開され、豊かな学校生活を創造することにつながると考え、上記の主題を設定した。

児童の認め合いを深めていくためには、発言や活動の具体的なよさに気付かせることが必要となる。そのためには、教師が児童一人一人の活動の様子を把握し、児童一人一人の育てたい力を明確にすることで、適切な評価や助言をしていくことが重要であると考えた。そこで、副主題を「評価の工夫と活用を通して」とした。

２　研究の進め方

研究を進めるにあたって、児童の発達段階を考慮し、低・中・高学年の３分科会に分かれた。分科会ごとに児童の実態を分析し、目指す児童像と仮説を設定し、授業研究を中心に研究を進めた。各分科会とも１学期に提案授業を行い、仮説を修正し、２学期に検証授業を行った。併せて、児童の実態と仮説を修正するために２学期にアンケート調査を実施した。

３　児童の実態

研究を進めるにあたり、児童が学級活動についてどのような意識をもっているのかを調べた。研究員の所属校においてアンケートをとり、回答の多かったものを低・中・高学年ごとにまとめ、実態の把握をした。同時に発達段階に応じた児童の変容についても分析した。

＊実施時期：平成１５年９～１０月　対象者：研究員所属校（２０校）の児童
調査人数：６０３名（低学年２２５名、中学年１６４名、高学年２１４名）
回答方式：自由記述

(1) 学級活動の中で、楽しいと感じたり、わくわくしたり、うれしかったり、やる気が出たりするのはどんなときですか

低学年	中学年	高学年
・自分の意見を言えるとき ・みんなにほめられたとき ・司会グループになるとき ・自分のやりたいことが決まったとき ・みんなで話合いをするとき ・集会活動（お楽しみ会）をするとき	・うまく意見が言えたとき ・意見を言って賛成してもらえたとき ・司会になったとき ・自分のやりたいことに決まったとき ・集会の準備のとき ・みんなで楽しく遊べたとき	・意見を言うとき ・自分の意見が採用されたとき ・自分の意見が認められたとき ・議題が楽しいことや、おもしろそうなとき ・みんなの意見が一致して決まったとき

【設問１についての考察】

学級活動の中で、児童がどのようなときに楽しさや満足感を得られているのかを知るための設問である。話合い活動においてはどの学年でも、自分の意見が発表できたときに充実感を得ている。集団の中で、自分を表現できたことの喜びは大きい。さらに、学年が上がるにつれて、自分の意見がみんなに受け入れられることに、より大きな満足感を得ている。低学年と中学年では、司会を楽しみにしている児童も多く、みんなの前で自分の力を発揮することに楽しさを感じている。お楽しみ会等、集会活動をあげる児童も多い。そうした活動へ向けての話合いのときには意欲が高まることが表れている。高学年になるにつれ、話合いによって合意が形成され、みんなの思いや願いがまとまることが、児童一人一人の意欲や満足感につながっていることが分かる。

(2) 学級活動の中で、友達のことで「すごいな」「いいな」「がんばっているな」と思うのはどんなときですか。

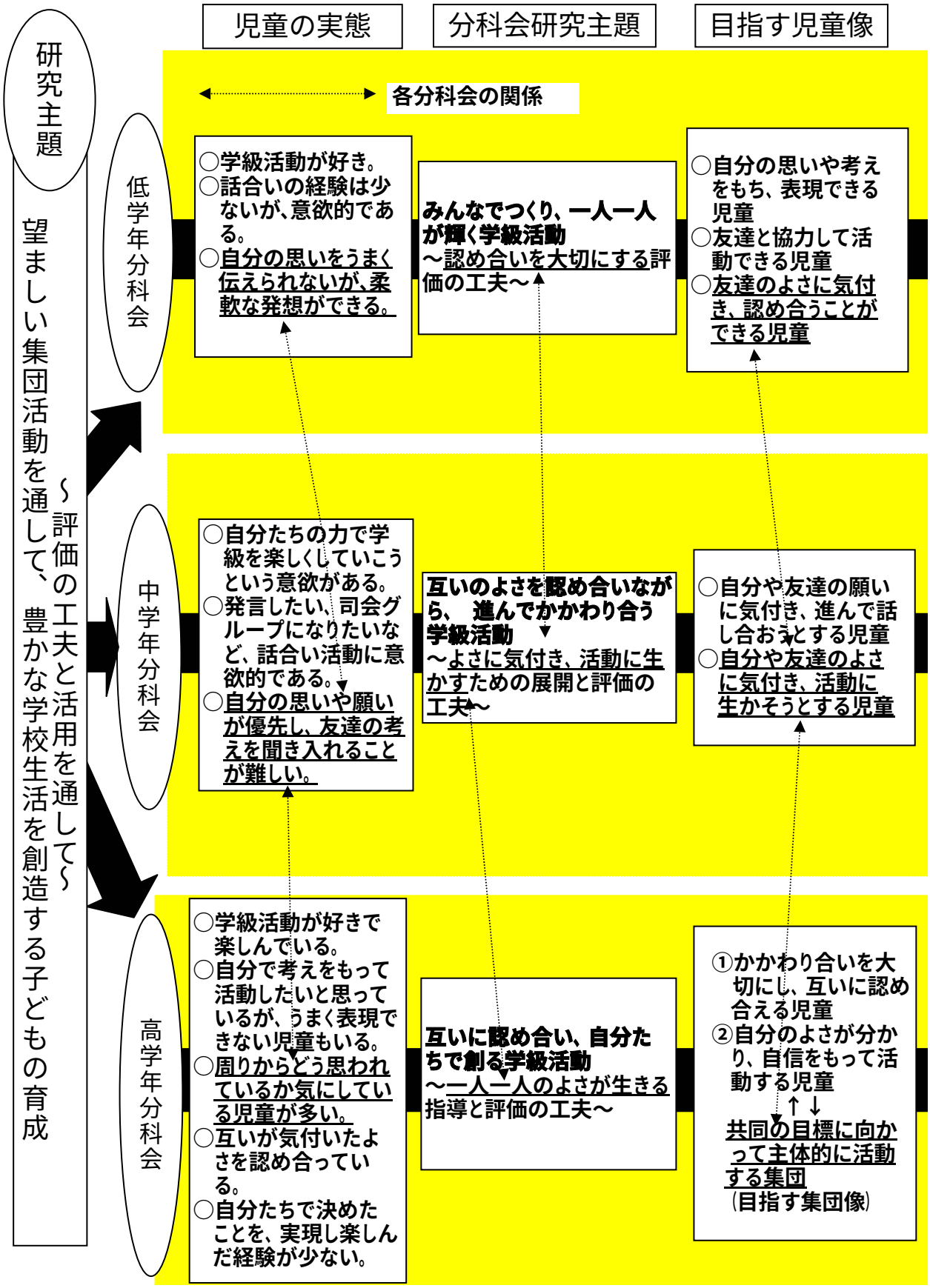
低学年	中学年	高学年
・意見をたくさん言っているとき ・よいアイディアを出しているとき ・司会の仕事をがんばっているとき ・意見をよく聞いてよく考えているとき ・係の仕事をがんばっているとき	・たくさん手を挙げて発表しているとき ・よい意見やよいアイディアを言っているとき ・司会を上手にしているとき ・お楽しみ会や係活動でみんなをまとめているとき	・説得力のある意見や新しい考えを発言したとき ・あまり意見を言わない人が意見を言っているとき ・司会が話合いを進めているとき ・係活動などで大変な仕事も責任をもってやっているとき

【設問２についての考察】

学級活動の中で、児童がどのようなときに友達のよさを認めているのかを知るための設問である。話合い活動においては、設問１と同様に発言に関する記述が多い。意見をたくさん言えることによさを感じているが、学年が上がるにつれ発言の内容に対しての記述がより具体的になり、友達の変容にも気が付いている。司会の仕事ぶりにがんばる姿を感じたり感心したりすることも多い。

4　研究構想図

児童の実態を比較すると、低学年から中学年になるにしたがい、自分の意見を言うことができるようになること、中学年から高学年になるにしたがい、発言をするときに友達の反応を意識できるようになることが分かる。こうした児童の実態を基に各分科会の研究主題と目指す児童像を設定した。



低学年では、自分のよさや友達のよさを見付け、認め合いの基礎（認め合いの芽）を培う。中学年では認め合いを活動に生かし、進んでかかわり合う。そして、高学年では、認め合いやかかわりを生かし、学級活動を児童自身で創り上げていく。このように全体を構想し、各分科会の仮説と視点・手だてを設定した。

仮説	視点・手だて
話合い活動を経験させる中で生まれた、友達のよさへの気付きや認め合いを教師が価値付け、学級全体に広げていけば、子どもたちの認め合おうとする態度が育ち、「みんなでつくり一人一人が輝く学級活動」が展開されるであろう。	視点　認め合いを価値付け、学級全体に広げていく工夫 〈認め合いを育てる助言〉 手だて1　①「評価する具体的な児童の姿」の表を基に一人一人の記録をとる。②学級全体に定着させたいと考える具体的な児童の言動を賞賛し、励ます。 〈認め合いを育てる場の設定〉 手だて2　①話合いの振り返りカードを書く時間を設定する。②気付いた友達のよさや自分のよさを交流し合う場を設定する。
よさに気付き、活動に生かすための展開と評価を工夫すれば、互いのよさを認め合いながら、進んでかかわり合う学級活動につながるであろう。	視点　よさに気付き、活動に生かすための工夫 〈願いの共有を図る展開〉 手だて1　議題に対する一人一人の思いや願いを確認し合える柱立てを工夫する。 〈展開に合わせた評価の重点化と具体化〉 手だて2　「評価する児童の姿」に基づいた評価の重点を授業の展開や学級の高まりに合わせて設定し、適切な助言を行う。 〈児童の実態に合わせた振り返りの活動〉 手だて3　児童の実態に合わせて、よさの発見を促す振り返り活動を工夫する。
互いのよさを認め合い、自分のよさに気付くための場の工夫と、一人一人のよさを活動に生かすための教師の助言をすれば、自分たちで創る学級活動につながるだろう。	視点1　互いのよさを認め合い自分のよさに気付く場の工夫 手だて　振り返りカードの掲示・見合う場の設定 視点2　一人一人のよさを活動に生かすための教師の助言 手だて　評価する児童の様子の具体化 実態に基づいた児童一人一人に対する「教師の願い」の明確化

Ⅱ　低学年分科会

分科会主題

みんなでつくり、一人一人が輝く学級活動
～認め合いを大切にする評価の工夫～

1　主題設定の理由

低学年の児童は、好奇心にあふれ、素直で柔軟な発想から思いついたことを教師に話してくる。また、教師や友達にほめられたり励まされたりすることで、活動意欲がさらに高まる。このことは、児童の実態調査（２ページ）からも分かる。一方、自分の思いを言葉でうまく表現できなかったり、自己中心的で友達の考えを聞かない言動が見られたりする面もある。集団の中で友達と協力して何かをやりとげた経験も少ない。

この時期にこそ、教師の適切な指導・助言により、楽しい集団活動を経験させ、「認め合いの芽」（認め合いやかかわり合いの基礎となる力）を育てていかなければならない。

そこで、本分科会では、学級活動の中で、友達のよさに気付くことが大切であると考えた。よさを認め合うことで、学級活動や集会活動などを「みんなでつくる」中で、自分の思いや願いだけでなく、友達の思いや願いも大切にし、「一人一人が輝く」ことができると考え、分科会主題を「みんなでつくり、一人一人が輝く学級活動」に設定した。

「一人一人が輝く」とは、自分の思いや願いを表現し、その思いや願いが大切にされ、集団活動の楽しさを味わうことである。そして、そのためには、進んで互いのよさを発見し、認め合えるような教師の助言や価値付けの基となる評価を工夫することが重要であると考えて、副主題を「認め合いを大切にする評価の工夫」とした。

また、目指す児童像については、次のように設定した。

☆　目指す児童像

- ○　自分の思いや考えをもち、表現できる児童
- ○　友達と協力して活動できる児童
- ○　友達のよさに気付き、認め合うことができる児童

こうした児童像を目指し、話合い活動を経験させる中で生まれた友達のよさへの気付きや認め合いを、教師が価値付け、学級全体に広げていけば、児童の認め合おうとする態度が育ち、「みんなでつくり、一人一人が輝く学級活動」が展開されると考え、認め合いの芽を育てるための教師の支援と児童の行動への価値付けにポイントをおいて、研究を進めた。

2　研究構想図

研究主題

望ましい集団活動を通して、豊かな学校生活を創造する子どもの育成
～評価の工夫と活用を通して～

児童の実態
・学級活動が好き
・話合いの経験は少ないが、意欲的である
・自分の思いをうまく伝えられないが、柔軟な発想ができる

教師の願い
・友達に対して安心して自己表現させたい
・友達同士、温かい気持ちで認め合わせたい
・意欲をもって集団活動に取り組ませ、活動の楽しさや満足感、達成感を味わわせたい

分科会研究主題
みんなでつくり、一人一人が輝く学級活動
～認め合いを大切にする評価の工夫～

分科会主題について
○「みんなでつくり」とは
・児童が試行錯誤をしながら、思いや願いを友達と協力して実現していくこと
○「一人一人が輝く」とは
・児童が生き生きと自分の思いや願いを表現できること
・一人一人の思いや願いが大切にされ、互いのよさを認め合えること
・集団活動の楽しさや満足感、達成感を味わえること

目指す児童像
・自分の思いや考えをもち、表現できる児童
・友達と協力して活動できる児童
・友達のよさに気付き、認め合うことができる児童

仮　説

話合い活動を経験させる中で生まれた、友達のよさへの気付きや認め合いを教師が価値付け、学級全体に広げていけば、子どもたちの認め合おうとする態度が育ち、「みんなでつくり、一人一人が輝く学級活動」が展開されるであろう。

視　点

認め合いを価値付け、学級全体に広げていく工夫

手だて１

認め合いを育てる助言

①「評価する具体的な児童の姿」の表を基に一人一人の記録をとる。
②学級全体に定着させたいと考える具体的な児童の言動を賞賛し、励ます。

手だて２

認め合いを育てる場の設定

①話合いの振り返りをカードに書く時間を設定する。
②気付いた友達のよさや自分のよさを交流し合う場を設定する。

３　研究の内容

子どもの認め合いを育てていくには、日ごろの「安心して自己表現したり、友達を温かい気持ちで見つめる学級の雰囲気づくり」や「意欲を高め、子どものよさや可能性を引き出すような楽しい学級活動の積み重ね」を大切にしていかなければならない。

これらを踏まえた上で、さらに子どもたちの認め合いを価値付け、学級全体に広げていく工夫の手だてとして、以下の二点を取り入れた。

(1) 手だて１　認め合いを育てる助言

ア　ねらい

気付きや認め合いを価値付けたり、意識付けたりして、認め合いの芽を育て、学級全体に広げる。

イ　方法

①　評価規準を基に作成した「評価する具体的な児童の姿」の表により、一人一人の記録をとり助言に生かす。(「評価規準」・「評価したい具体的な児童の姿」の表は８・９ページ参照)

②　学級全体に定着させたいと考える具体的な子どもの言動を賞賛し、励ます。

ウ　実践から

２年生　議題名「みんながなかよくあそぶには」(６月)

・　児童一人一人の活動を評価することができたが、司会の支援と並行して行う児童の活動記録の取り方や助言について課題が残った。

・　話合い活動の後、個々の「ふりかえりカード」に教師の言葉を書き入れることによって児童の言動を賞賛し、励ますことができた。

話合い活動における評価規準

	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
話合い活動	・教師の支援により学級生活に関心をもち、自分たちの身近な問題に気付いたり、話合いに参加しようとしたりしている。	・教師とともに、学級で話し合う議題を考えることができる。 ・友達の意見を聞き自分の考えをもつことができる。	・自分の思いや願いを、みんなに聞こえる声ではっきりと発表することができる。 ・友達の意見を最後まで聞くことができる。 ・教師の支援を基に簡単な司会や記録ができる。	・発表の仕方が分かる。 ・話合いの進め方や話合いのきまりが分かる。

評価する具体的な児童の姿

「評価規準」を、実際の話合い活動における児童の活動の評価や助言に生かしていくために、評価規準に基づいた「評価する具体的な児童の姿」の表を作成し、手だて１で活用した。

場面	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識･理解
議題の確認	・議題について関心をもち、意欲的に話合いに参加しようとしている。 ・議題の提案理由をしっかり聞こうとしている。 ・司会や議題発表者の方を向いて聞く。	・議題について、自分の思いや願いをもつ。 ・あらかじめ意見を考えておく。	・議題や提案理由をみんなに分かるように発表することができる。 ・議題や提案理由をしっかり聞くことができる。	・議題や提案理由が分かる。
話合い	・分からないことを、進んで質問する。 ・発言を積極的にする。 ・友達の意見に対して進んで意思表示をしようとする。 〔うなずく つぶやく 拍手する 表情・笑顔〕 ・友達の意見を聞こうとしている。 ・友達の思いやよさを考え、認めようとしている。 ・みんなの意見をまとめようとしている。 ・決まったことを受け止め、実践に生かそうとしている。	・話合いの柱（項目）に沿って考える。 ・自分の考えや、意見をもつ。 ・友達の思いに気付く。 ・意見の違いや、似ているところを考える。 ・友達の意見のよさを考える。 ・経験を生かして考える。 ・実践活動への見通しをもって考える。 ・今までにない新しい考えをもつ。 ・いくつかの意見のよいところを合わせて考える。 ・実現に向けて、よりよい工夫を考える。 ・話合いの進行について考える。 ・友達のことを考え、思いやる。	・みんなに分かるように、はっきりと発言することができる。 ・話合いの柱（項目）に沿って発言できる。 ・意見の理由が言える。 ・分からないことを質問できる。 ・友達の意見に対して意思表示ができる。 ・賛成意見が言える。 ・反対意見が言える。 ・友達の意見に応じた発言ができる。 （つけたしです。～さんと違います。～さんと似ています。） ・例を挙げて分かりやすく発言できる。 ・教師の支援の基、意見をまとめたり、記録したりすることができる。（司会グループ） ・決まったことを発表できる。（司会グループ）	・話し合う内容が分かる。 ・話合いの進め方が分かる。 ・発言の仕方や、聞き方が分かる。 ・話合いの役割分担が分かる。 ・教師の支援の基話合いのまとめ方や記録の仕方が分かる。 （司会グループ）
振り返り	・話合いを振り返り、自分や友達のよかったところを見付けようとする。 ・友達のよかったところを進んで発表しようとする。 ・気付いたことを、その後の活動に生かそうとする。	・話合いを振り返り、自分や友達のよかったところを考え、具体的に見付けられる。	・話合いを振り返り、自分や友達のよかったところを「ふりかえりカード」に書くことができる。 ・よかったことを、みんなに分かるように発表できる。	・「ふりかえりカード」の書き方が分かる。 ・振り返りが今後の活動に役立つことが分かる。

１年生　議題名「みんなでかかりをきめよう」（９月）

・　評価したい子どもの姿から本時の評価のポイントを３点選び、記号化して話合いの記録をとる試みをしたが、司会の支援と並行して行うのは難しかった。
・　話合いの基礎となる力を育てるこの時期には、話合いの中で適宜助言していくことの必要性が明らかになった。
・　話合いの中の助言と司会グループの支援を並行して行うためには、学年に応じた議題選びや資料の充実、司会グループの予行練習など、事前の十分な準備・工夫が必要であることが分かった。

(2) 手だて２　認め合いを育てる場の設定

ア　ねらい

子どもが自分や友達のよさに気付き、認め合ったり、自分たちの成長を確かめたりできるようにする。

イ　方法

①　話合いの振り返りをカードに書く時間を設定する。
②　気付いた友達のよさや自分のがんばりを交流し合う場を設定する。

ウ　実践から

・　「ふりかえりカード」の作成に当たっては、自己評価の項目は色を塗らせるようにし、相互評価については、学年に応じて自由記述のスペースを設けたので、児童が負担を感じずに楽しく取り組めた。
・　カードへの記入は、習慣化すると、短時間で行うことができるようになり、友達のよさも、数多く具体的に見付けられるようになってきた。
・　カードの相互評価の欄を「がんばったさん」と名付けることで、友達のよさに気付きやすくなった。
・　全員のカードを教室に掲示することで、個人の気付きが学級全体に広がった。

写真　　写真

左が１年生の授業で使用したカード、右が２年生の授業で使用したカードである。１年生は、「がんばったさん」の欄に友達の名前のみを記入した。２年生では、がんばったさん」の欄に友達の名前とともに、選んだ理由を書いている。

４　研究の成果と課題

(1)　「手だて１」について（成果○　課題※）

○　評価規準に基づいた「評価する具体的な児童の姿」の表を活用して、児童一人一人の記録を残すことにより、終末の助言や賞賛に生かすことができた。

○　司会グループへの助言を話合いの途中で適宜行うことにより、学級全体に話合いの進め方が伝わり、話合いがより活発になった。

※　終末の助言の時間が限られているため、助言のポイントや観点の絞り方を工夫する必要がある。

※　児童の実態から、話合いを進める上で教師の指導・助言が必要なので、児童一人一人の記録の効率的な取り方を工夫する必要がある。

※　司会グループへの支援を効率的に行えるよう、計画委員会のもち方、司会グループの役割分担など事前の準備を工夫していきたい。

(2)　「手だて２」について
（成果○　課題※）

○　「ふりかえりカード」での自己評価により、話合い活動に積極的に参加するようになってきた。

○　「ふりかえりカード」に「がんばったさん」を書くことにより、友達のよいところを見付けようとする姿勢が育ってきた。

○　「ふりかえりカード」の「がんばったさん」を発表し合うことにより、友達の新たなよさを発見したり、認められることで満足感を得たりして、認め合いの芽が育ってきた。

○　「ふりかえりカード」は、教師が児童一人一人の取り組みを知ったり、課題をつかんだりする上で有効であった。

○　「ふりかえりカード」への言葉の書き入れや掲示、朝の会での紹介などで、終末の助言で取り上げられなかったことを補うことができた。

○　「ふりかえりカード」を掲示しておくことによって、児童にも自分の活動の積み重ねや気付き・成長などが分かり、活動への意欲が高まってきた。

※　学級会の中で、より効果的な振り返りができるように、話合い活動と振り返りの時間の設定を工夫していく必要がある。

※　カードの掲示や交流も効果的だが､学級全体に広めるためのさらなる工夫が必要である。

※　「ふりかえりカード」の作成については、項目立てや記述スペースの工夫など、学年や児童の実態に応じて検討・工夫が必要である。

手だて１、２により話合い活動の中で、教師が児童の行動を評価し、指導・助言することで、認め合いの芽が育った。一人一人の思いや願いが大切にされ、発言する児童が増えた。児童は、話合い活動を楽しむようになり、学級活動への意欲が高まった。

Ⅲ　中学年分科会

分科会主題

互いのよさを認め合いながら、進んでかかわり合う学級活動
～よさに気付き、活動に生かすための展開と評価の工夫～

１　主題設定の理由

中学年の児童の多くは、学級会（話合い活動）を楽しいと感じている。思ったことをのびのびと発表する子が多く、３ページの実態調査からも分かるように、友達の前で意見が言えたときや、自分の意見に友達が賛成してくれたときなどに楽しさを感じている。その反面、自分の意見を出すだけで、学級をまとめていくような発言をすることは少なく、自分の意見が通らないときには乱暴な言葉を言ったり、すねてしまったりするような児童も見られる。また、話合いの進め方がまだよく分からなかったり、互いに意見を出し合い考えを深めていくことが難しかったりするため、すぐに多数決で決めようとする傾向も見られる。これは、個が優先してしまい、集団としてのかかわり合いの意識が薄いからと思われる。

以上のような実態から、集団としての結び付きが強まる３・４年生の時期に、児童の願いや興味を生かした学級活動を通して、友達とよりよくかかわる力を育てたいと考えた。そのためには、互いのよさを知り、認め合い、活動に生かしていくことが大切である。「自分や友達のよさがわかる」「安心して自分を表現できる」と思える経験を重ねることが、学級の中での自己の所属感を高め、友達への理解を深めることにつながる。さらには学級集団としての意識を高め、進んでかかわり合う活動につながるのではないかと考えた。

そこで、本分科会では目指す児童像を次のように設定した。

☆　目指す児童像

○　自分や友達の願いに気付き、進んで話し合おうとする児童
○　自分や友達のよさに気付き、活動に生かそうとする児童

このような児童を目指し、よさの発見を積み重ねて、自分や友達のよさを大切にする雰囲気づくりをし、一人一人のよさが生かされる展開と評価の工夫をすれば、進んでかかわり合う学級活動が展開されると考え、本研究主題を設定した。

2　研究構想図

研　究　主　題

望ましい集団活動を通して、豊かな学校生活を創造する子どもの育成
～　評価の工夫と活用を通して　～

児童の実態

・自分たちの力で学級を楽しくしていこうとする意欲がある。
・発言したい、司会グループになりたいなど、話合い活動に意欲的である。
・自分の思いや願いが優先し、友達の考えを聞き入れることが難しい。

教師の願い

・自分や友達のよさに気付いてほしい。
・活動の中で、自分のよさを生かしてほしい。
・自分の考えも友達の考えも大切にしてほしい。
・自分たちの願いを実現する楽しさを味わってほしい。

分　科　会　研　究　主　題

互いのよさを認め合いながら、進んでかかわり合う学級活動
～よさに気付き、活動に生かすための展開と評価の工夫～

目　指　す　児　童　像

○自分や友達の願いに気付き、進んで話し合おうとする児童
○自分や友達のよさに気付き、活動に生かそうとする児童

仮　　説

よさに気付き、活動に生かすための展開と評価を工夫すれば、互いのよさを認め合いながら、進んでかかわり合う学級活動につながるだろう。

視　点　よさに気付き、活動に生かすための工夫

手だて１　願いの共有を図る展開
議題に対する一人一人の思いや願いを確認し合える柱立てを工夫する。

手だて２　展開に合わせた評価の重点化と具体化
「評価する児童の姿」に基づいた評価の重点を授業の展開や学級の高まりに合わせて設定し、適切な助言を行う。

手だて３　児童の実態に合わせた振り返り活動
児童の実態に合わせて、よさの発見を促す振り返り活動を工夫する。

３　研究の内容

(1) 研究の視点と手だて

「よさに気付き、生かすための工夫」を研究の視点に、次の手だてにより学級活動を展開し、主題にせまった。

ア　手だて１　願いの共有を図る展開……話合いの柱立ての工夫

・ 一人一人の願いや思いを共有し、話合いのねらいを確認するために話し合う項目（柱）を立てる。
・ 提案理由や共有した思いや願い、確認したねらいが、話合いを進める時のよりどころとなるように柱立てを工夫する。

イ　手だて２　展開に合わせた評価の重点化と具体化……評価の重点の設定

・『評価する児童の姿』(17 ページ)を基にした評価の重点を明確に設定し、評価する。評価の重点は、授業の展開、学級の高まり（実態)、議題等を考慮して設定する。

ウ　手だて３　児童の実態に合わせた振り返り活動……教師の助言や発表の場・カードの工夫

振り返り活動は、児童の実態に合わせて次の３つのステップを設けた。

・　ステップ１　教師の助言・賞賛が中心の振り返り活動
・　ステップ２　児童のよさの発見が中心の振り返り活動
・　ステップ３　カードを活用した振り返り活動

(2) 実践事例

３年生で行った話合い活動の実践事例を、手だて３の振り返り活動のステップに合わせてまとめた。

【　ステップ１　】評価の重点に合わせた教師の助言や、学級全体に定着させたい児童の言動への賞賛・励ましをする。

６　月

議　　題　　朝の会で歌う歌を決めよう

提案理由　　みんなで朝の歌を歌いたいから

展　　開

話合いの柱立て（手だて１）	評価の重点（手だて２）
①　朝の会で歌を歌いたいですか。	
②　歌いたい歌を発表しましょう。	**◎自分の考えを発表しようとする。**
③　歌を１つに決めましょう。	**◎よりよい友達の考えに同意しようとする。**

○　議題は、係からの提案である。
○　みんなで話し合うためには、みんなで確認したねらいや提案理由をよりどころにしながら、話合いを進めたり、決定したりしなくてはならないことを指導した。

教師の助言・賞賛が中心の振り返り活動（手だて３）

・「『２つの意見を合体させると、いいところが残るよ。』と言ってくれた人は、よい考えを言ったね。」
・「友達のことも考えてやさしい気持ちで意見が言えましたね。」
・「自分のことばかり考えた意見ではまとまらないね。」
・「『①で決めたことが大事なんだよ。』と気が付いて、言ってくれた人がいましたね。」
・「司会の人は、『反対の人はいませんか。」と確かめながら進めることができましたね。」
・「副司会の人は、よく見ていて、初めて手を挙げた人を指名していましたね。」

話合いの柱立てを工夫したことで、柱立て①で、「楽しくなりたいから歌いたい。」「元気を出したいから歌いたい。」というねらいを確認することができ、ねらいにあった歌を選ぶことができた。

評価の重点を設けることで、評価の観点が明確になり、具体的な助言ができた。

【　ステップ２　】教師の助言や賞賛だけでなく、児童が互いのよさに気付き、認め合える発表の場を設ける。

９　　月

議　　題　　絵本の発表会をしよう

提案理由　　どんな本を作ったか知らせたいから。

展　　開

話合いの柱立て（手だて１）	評価の重点（手だて２）
①発表会でお客さんにどんなことを知らせたいですか。 **②発表会のプログラムを決めましょう。** **③役割を決めましょう。**	**◎友達の考えと自分の考えを合わせて、よりよい考えをもとうとする。** **◎意見をまとめながら話合いを進める。**

○　総合的な学習の時間に作った生き物絵本を保護者に発表したいということから議題が設定された。
○　発表会の企画は初めてなので、柱立て①で発表会の趣旨やみんなの願いをしっかり確認し合った。
○　一つずつ順序よく確認しながら決定していくやり方を経験させた。

１０　月

議　　題　　パントマイム大会をしよう

提案理由　　みんなでやると、なかよくなれるから。

展　　開

話合いの柱立て（手だて１）	評価の重点（手だて２）
①パントマイム大会のやり方を決めましょう。 **②役割を決めましょう。**	**◎提案理由にあった考えをもとうとする。** **◎今までの経験を生かしたまとめ方や進行の仕方を考えようとする。**

○　提案理由の中に願いが含まれているので、一人一人の願いを確認する話合いの柱は立てなかった。
○　役割を決める場面では、「やったことがあるから譲る。」「得意だからやる。」　などの意見が出された。

児童のよさの発見が中心の振り返り活動（手だて３）

話合いが終了後、友達のよさを発表する振り返りの時間を設けたところ、次のような発言があった。

・「〇〇さんは、途中で意見を変えたのでよく考えているなと思いました。」
・「意見を言わなくても、意見をよく聞いてうなずいていました。」
・「提案理由のように、みんなでなかよく決めることができてよかったです。」
・「みんなが意見を言えてよかった。反対意見も言えてよかった。」
・「大会の司会を決めるときに、『一度やったから譲ります。』と言った〇〇さんがよかったです。」

児童の言葉から、話合いの姿勢や発言内容から、友達のよさを見付けることができるようになったことが分かる。

【　ステップ３　】振り返りカード（ミニ日記）の活用により、一人一人のよさへの気付きを深め、学級全体で共有する。

１１　月

議　　題　　なかよくなろう会をしよう。

提案理由　　毎週来てくれる○○先生ともっとなかよくなって、ありがとうの気持ちを伝えたいから。

展　　開

話合いの柱立て（手だて１）	評価の重点（手だて２）
①なかよくなるためにしたいことは何ですか。 **②ありがとうの気持ちを伝えるためにしたいことは何ですか。** **③役割を決めましょう。**	**◎友達の意見を聞いて、よりよい考えをもとうとする。** **◎学級全体のことも考えた意見をもとうとする。**

○　提案理由がはっきりしているので、柱立てが明確で、ねらいに沿って話合いが進んだ。
○　友達の意見をよく聞いて、自分の意見を変える児童が多くなった。

〔　ミニ日記を活用した振り返り活動　〕

↑ミニ日記に記入する児童

ミニ日記の掲示→

ミニ日記（振り返りカード）を掲示すると、児童は興味をもって友達のカードを読んでいる。ミニ日記には、「自分のこと」「友達のこと」が書かれている。一人一人が自分のよさと友達のよさを発見できるとともに、よさの発見を学級全体に広げることができる。

(3) 評価する児童の姿

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
◎話合いを楽しみにしている。 ◎議題を提案したいと思う。 ◎決まった議題に対して自分の考えをもとうとする。 ◎自分の考えを発表しようとする。 ◎友達の考えを分かろうとする。 ◎意見をまとめようとする。 ◎決まったことに取り組もうとする。 ◎話合いで決まったことをうれしく思う。 ◎話合いや活動を振り返り、よかったことを見付けようとする。 ◎よくできたことを次の活動に生かそうとする。 ●司会や記録などの役割に挑戦しようとする。	◎話合いの柱立てを考える。 ◎学級生活の中から議題を考える。 ◎みんなのよさを生かせる議題を考える。 ◎決まった議題に対して考えをもっている ◎話合いの柱立てに沿って考える。 ◎話合いのめあてや友達の考えを合わせてよりよい考えにしていく。 ◎自分や友達のよさを生かせるように考える。 ◎今までの経験を生かしたまとめ方や進行の仕方を考える。 ◎実践可能な内容かどうか考える。 ◎友達や自分のよかったことを見付ける。 ●柱立てを考えながら司会進行をする。 ●話し合ったことを順序よく記録する。	◎議題や提案理由を分かりやすく説明する。 ◎自分の考えを分かるように言う。 ◎友達の考えを最後まで聞く。 ◎自分や友達のよさを生かした意見を言う。 ◎提案理由やねらいに合った発言をする。 ◎柱立てに沿った発言をする。 ◎決まったことを協力して実践する。 ◎自分や友達のよさを生かして実践する。 ●柱立てにそって司会進行をする。 ●決まったことを確認しながら進行する。 ●多数決に頼らない。 ●意見をまとめるときには、反対意見がないか確認する。 ●多くの友達が発言できるように指名する。 ●分かりやすくまとめて記録する。	◎議題の提案の仕方が分かる。 ◎提案理由の意味が分かる。 ◎話合いの進め方が分かる。 ◎友達の意見のよいところが分かる。 ◎話合いで決まったことが分かる。 ◎自分の役割が分かる。 ◎代表委員会や学校行事と関連する議題が分かる。 ◎は、児童全員 ●は、司会グループを対象とする。

4　成果と課題

(1) 成果

ア　手だて１「願いの共有を図る展開」について

○　柱立ての工夫により、何を話し合うかということがはっきりしたので、児童一人一人が自分の思いや願いを基に考えを出すことができた。

○　自分だけでなく、友達の思いや願いも感じ取ることができた。

イ　手だて２「展開に合わせた評価の重点化と具体化」について

○　児童の実態に合わせ、評価の重点を明確にし、適切な助言をしたことで児童の発言内容の中に友達のよさにかかわるものが増え、学級全体の活動意識が高まった。

ウ　手だて３「児童の実態に合わせた振り返り活動」について

○　単にカードを使うのではなく、教師の助言を基に、よさを発表し合う方法を児童の実態に応じて工夫することにより、互いのよさを認め合う姿勢が育った。

○　振り返りカードを掲示することで、一人の児童のよさについての気付きを学級全体で共有することができた。そして、児童は、様々なよさがあることに気付くことができた。

○　自分や友達のよさを発見することが、互いを認め、進んでかかわり合いながら活動に生かそうとする意欲につながった。

(2) 課題

○　自分のよさに気付いていない児童や、自分のよさには気付いているが、それを集団の中での活動に具体的に生かしきれない児童に対する手だてを工夫していきたい。

○　評価の具体化を図る上で、６年間を見据えて、より系統的な重点の設定について検討し、工夫していきたい。

○　展開の中で振り返り活動をどのように位置付けるか、また、児童の実態に応じて、どのような形式の振り返りカードを使うのかについてさらに工夫していきたい。

○　話合いでの認め合いやかかわり合いが、実践活動においてどのように生かされているか検証を進めたい。

Ⅳ　高学年分科会

分科会主題

『互いに認め合い、自分たちで創る学級活動』
～児童一人一人のよさが生きる指導と評価の工夫～

１　主題設定の理由

高学年の児童の実態を学級活動（１）の振り返りや実態調査から考察してみた。学級活動に関しては、「好き」であり「楽しい」と感じている児童が多い。また、様々な活動において「自分で考えをもって活動したいと思っている」児童もいる。さらに、友達のよさに気付き、自分もそうしたいと感じている児童もいることが分かった。

しかし、「自分の考えをうまく表現できない。」「周りから自分がどう見られているか気になってあまり意見が言えない。」「反対されるのがいや。」など、自己表現の仕方が分からなかったり、友達からの見方を気にしたりしている児童が多いという面も見られる。また、自分たちで決めたことを実践し、楽しんだ経験があまりないため、学級活動をどのように進めていけばよいかとまどっている児童も見られた。

以上のような実態から、「みんなでやってよかった、楽しかった。」（満足感・成就感）「自分の意見が言えた。みんなが認めてくれた。」（自己有用感）「友達と一緒でよかった。」（認め合い・所属感）等の気持ちを児童が感じとることで、自分のよさを知り、次の活動への意欲が高まると考えた。

児童一人一人が自分のよさを知ることで自信をもち、一人一人のよさを互いに認め合って活動することができるようになれば、学級全体の共同の目指すべき目標（学級目標など）や共有する価値（活動のめあてやねらいなど）を意識しながら活動ができる集団に成長していくことも期待できる。

そして、このような活動の積み重ねにより、高学年の児童が学級活動をさらに楽しみ、自分から主体的に友達や物事にかかわりをもち､自分たちの力で問題を解決できる学級活動（自分たちで創る学級活動）を行うことができる。

こうしたことを踏まえて、本研究では、目指す児童像と集団像を次のようにとらえた。

〈目指す児童像〉

・かかわり合いを大切にし、互いに認め合える児童
・自分のよさが分かり、自信をもって活動する児童

〈目指す集団像〉

・共同の目標に向かって、主体的に活動できる学級

こうした児童像等を目指し、互いのよさを認め合い、自分のよさに気付く場の工夫と一人一人のよさを活動に生かすための教師の助言を適切に行うことで、自分たちで創る学級活動が展開されると考え、本研究主題を設定した。

～研究仮説～

互いのよさを認め合い自分のよさに気付くための場の工夫と、一人一人のよさを生かすための教師の助言をすれば、自分たちで創る学級活動につながるだろう。

2　研究構想図

研究主題　望ましい集団活動を通して、豊かな学校生活を創造する子どもの育成
～評価の工夫と活用を通して～

児童の実態

- 学級活動が好きで楽しんでいる。
- 自分で考えをもって活動したいと思っているがうまく表現できない児童もいる。
- 周りからどう思われているか気にしている児童が多い。
- 互いが気付いたよさを認め合っている。
- 自分たちで決めたことを、実践し楽しんだ経験が少ない。

教師の願い

- 共同の目標を意識し、よりよい学級を目指した活動をさせたい。
- 自分の考えを表現する方法を学ばせたい。
- 学級の中での存在感を一人一人に味わわせたい。
- よさを見る目を高めていきたい。
- 自分たちで問題を解決し、実践する喜びを味わわせたい。

分科会研究主題
互いに認め合い、自分たちで創る学級活動
～一人一人のよさが生きる指導と評価の工夫～

目指す児童像

1　かかわり合いを大切にし、互いに認め合う児童
2　自分のよさが分かり、自信をもって活動する児童

目指す集団像

共同の目標に向かって主体的に活動する学級

仮説

互いのよさを認め合い自分のよさに気付くための場の工夫と、一人一人のよさを生かすための教師の助言をすれば、自分たちで創る学級活動につながるだろう。

視点１

互いのよさを認め合い、自分のよさに気付く場の工夫

手だて

振り返りカードの掲示・見合う場の設定

視点２

一人一人のよさを生かすための教師の助言

手だて

評価する児童の様子の具体化

実態に基づいた児童一人一人に対する「教師の願い」の明確化

自分たちで創る

自分が役立ってうれしいなぁ

次はこんなことをみんなでやってみたい

みんなでやるのって、楽しいなぁ！

あの人のこんなところがいいなぁ

みんなで何かやろうよ！

楽しい！もっとやりたい

こんなクラスにしたいなぁ

３　研究の内容

(1) 視点１・互いのよさを認め合い、自分のよさに気付く場の工夫

その日の話合いを振り返る際、自分の取り組みだけではなく、友達のよかったところも振り返り記入できる『見つけよう伝えようカード』を用意した。記入後、教室に掲示し、お互いに読み合える時間と場を確保した。児童にとって、自分が友達にどんなことを書かれているか、友達が誰のことをどのように書いているのか等の関心は高く、貼り出されると時間を使ってじっくりと読んでいる児童の姿が見られた。

友達に自分のことを書いてもらうことで、自分のよさに気付いたり、改めて認識したりすることができ、それが次からの取り組みに生かされる。こうしたことの繰り返しにより、児童の自信を育てることにもつながった。また、友達に認めてもらったことが喜びややる気につながった児童は、友達のよさを見付けようとする意欲や認めようとする心情が高まった。

『見つけよう伝えようカード』には教師の言葉は書かない。教師の言葉に左右されず、児童相互がもっている感性と言葉で認め合うことで、より気持ちを伝え合えると考えたからである。児童一人一人に対する教師の助言は、学級会カードの「今日の自分を振り返って」の欄に記入した。

「見つけよう伝えようカード」

「学級会カード」

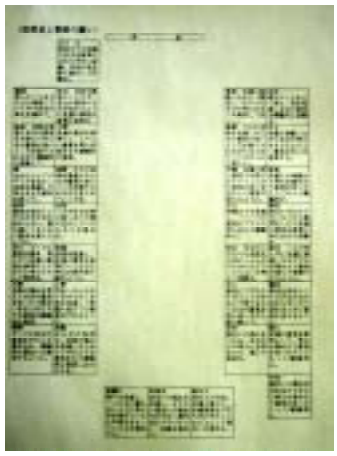
(2) 視点２・一人一人のよさを生かすための教師の助言

学級活動を通して『評価する児童の様子』を場面ごとや役割別にできるだけ具体的に項目化しておくことで、一人一人のよさをより評価できるものと考えた。学級活動の前には必ずこの表を見て、どのような姿を評価していくか具体的にイメージをもてるように確認した。

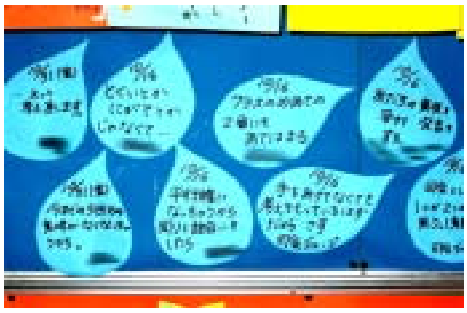
また、児童一人一人の実態をできるだけ正しくとらえ、教師の願いを明確化して助言に生かすため、『児童の実態と教師の願い』を作成した。この表には児童一人一人の個別の目標が記されている。学級活動中も確かめながら評価できるように、座席表と同じように児童一人一人の目標を並べた。個人カードへの助言はもちろん、終末の助言の中で学級全体へと広げていきたい児童の姿や変容を評価する上でも役立てた。

さらに、終末の助言をカードのような形で残し、掲示することで、その助言をその後の話合いに生かす工夫をした。その中に自分の名前が書かれて掲示されることを励みにしている児童の姿も見られる。

「児童の実態と教師の願い」カード →



「掲示カード（終末の助言）」→



(3) 評価する児童の様子

高学年では行動が多様化し、より多面的な評価が必要となる。「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の４観点では相互にかかわり合う部分が多くなることから、４観点の評価規準から一歩進め、「計画」「話合い」「実践」「振り返り」の４場面で、児童の行動を評価することのできる表を作成した。さらに、より効果的に評価できるように、目指す児童像の「かかわり合いを大切にし、互いに認め合う。」を「社会性をはぐくむ」ととらえ、「自分のよさが分かり、自信をもって活動する。」を「自主性をはぐくむ」とした。

◎計画

児童全員	司会グループ
●議題を出す。 自・自分の興味・関心で議題を出している。 社・みんなのことを考えて議題を出している。 社・よりよい学級になるような議題を出している。 社・みんなで話し合う議題を選んでいる。 **●考えを書く。** 自・自分なりの考えを書いている。 社・みんなのことを考えて書いている。 社・提案理由を意識して考えを書いている。 社・前回の振り返りを生かして考えを書いている。 ☆・根拠を明らかにして考えを書いている。	**●計画を立てる。** 社・教師の助言を受けながら計画を立てている。 社・前回の振り返りを生かして計画を立てている。 社・役割分担を考えている。 社・学級会カードを用意している。 自・自主的に計画委員会を開いている。 **社＝社会性** **自＝自主性** **☆＝社会性・自主性両方**

◎話合い

児童全員	司会グループ
●意思表示をする。 ☆・拍手をしている。 ☆・挙手をしている。 ☆・うなずいている。 ☆・つぶやいている。 ☆・メモをとっている。 ☆・表情に出している。 ☆・視線を向けている。 **●発言する。** 自・指名されて発言している。 自・進んで自分の考えを発言している。 社・友達の代わりに発言している。 社・提案理由に沿って発言している。 社・過去の経験を生かして発言している。 ☆・前回の振り返りを生かして発言している。 社・友達の意見に対して発言している。 （賛成、反対、質問、付け足し） ☆・友達の意見を受けて自分なりに解釈したことを発言している。 自・自分の考えを分かりやすく発言している。 自・自分の考えを積極的に主張している。 社・話合いの過程を踏まえて発言している。 （折衷案、新しい考え、譲歩、まとめ） 社・実践活動への見通しをもった発言をしている。 社・司会グループに助言している。	**●進める。** ☆・司会台本を見ながら進めている。 ☆・立てた計画を基に進めている。 ☆・提案理由を意識して進めている。 ☆・友達の助言を生かして進めている。 ☆・話合いの状況に応じて進め方を変更している。 ☆・話題からそれたとき、元に戻そうとしている。 ☆・時間を意識して進めている。 ☆・多くの人が意見を出せるように工夫して進めている。（小グループでの話合い、指名） ☆・前回の振り返りを生かして進めている。 ☆・少数意見も大切にして進めている。 ☆・出された意見を記録している。 ☆・ていねいな字で記録している。 ☆・話し合ったことを色や矢印を使って黒板に記録している。 **●まとめる。** 社・みんなが納得しているかどうか確認している。 社・決まったことを発表している。

●振り返りをする。
社・友達のよかったところを見付けて書いている。
自・自分のよかったところを見付けて書いている。
社・友達のよかったところを見付けて発表している。
自・自分のよかったところを見付けて発表している。
社・会の進め方についてよかったことや課題の振り返りをしている。
自・次回への自分なりのめあてをもち、カードに書いている。

◎実践

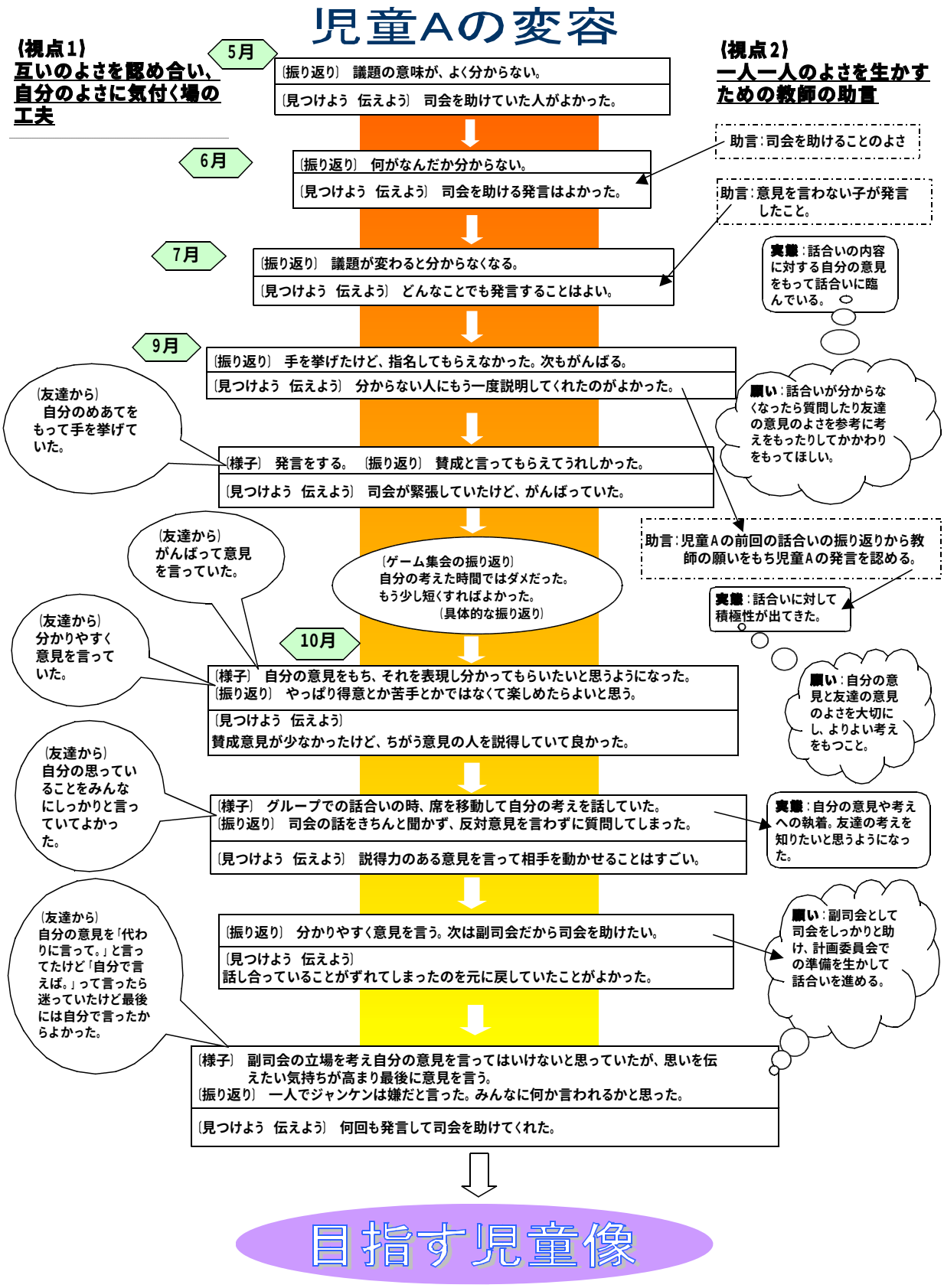
児童全員
●活動する。 自・楽しんで活動している。 社・協力して活動している。 自・自分から進んで活動している。 社・みんなで楽しく活動している。 ☆・めあてを意識して活動している。 ☆・よりよい実践になるように工夫して活動している。 ☆・役割に責任をもって活動している。

◎振り返り

児童全員
●気付く。 自・自分のよかったところに気付き、カードに書いている。 社・友達のよかったところに気付き、カードに書いている。 社・学級のよかったところに気付き、カードに書いている。 ☆・今後の課題に気付き、カードに書いている。

(4) 手だてが児童の変容に強く結び付いた実践例

はじめはほとんど発言しなかった児童であるが、教師の助言によって友達のよさに気付くようになり、自分もやってみようとする意欲が高まっていった。さらには、友達から認められることで少しずつ自信をもてるようになった。こうした実態を把握し、新たな願いをもって助言に生かした。３つの手だてが作用し合い、目指す児童像に近付いた。

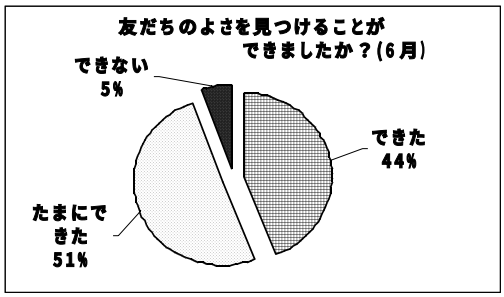


(5) アンケート結果より

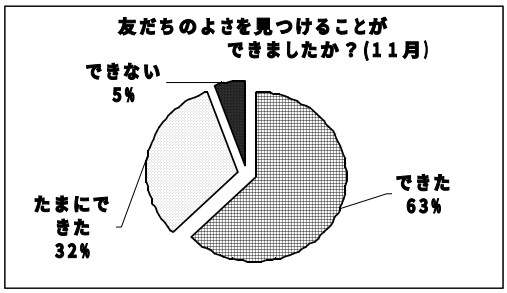
高学年分科会では、研究の成果と課題を得るためにアンケート調査を実施した。

［＊実施時期　①③－平成１５年６月　　②④－平成１５年１１月
　調査人数　２１４名
　回答方式　選択式］

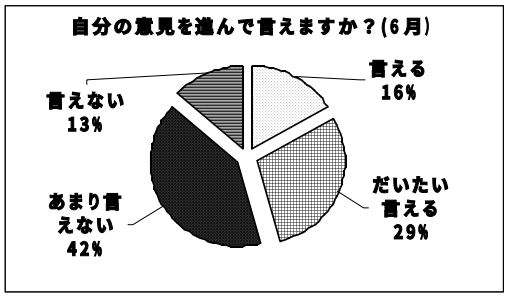
①



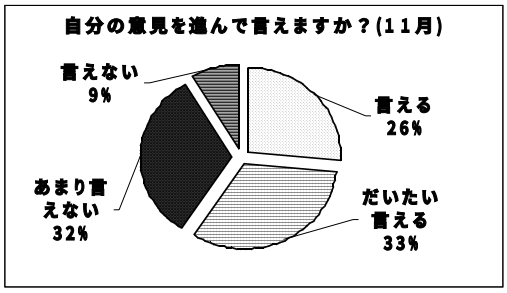
②



③



④



①と②のグラフから、「できた」と答えた児童が４４％から６３％に増えており、手だてが有効であったことが分かるが、「できない」と答えた児童数に変化がないところに課題が残る。

③と④のグラフから、「言える」「だいたい言える」児童が４５％から５９％に増えたこと、「言えない」児童が１３％から９％に減ったことから手だてが有効であったことが分かるが、「言えない」児童が９％いることは、課題である。

４　成果と課題

(1) 成果

ア　互いのよさを認め合い、自分のよさに気付く場の工夫

- 振り返りカード（「見つけよう・伝えようカード」）の活用で、友達のよさに気付くことができるようになった。
- 友達のよさを自分に取り入れて、活動するようになった。
- 友達に認められて、自信をもって活動するようになった。
- 活動の広がりとともに、視野が広がり、様々なよさを見付けることができるようになった。

イ　一人一人のよさを生かすための教師の助言

- 今まで気付かなかった友達のよさを見付けようとしている。
- 「児童の実態と教師の願い」を活用することで、一人一人の実態に即した助言をすることができた。
- 教師の助言から、児童が次の活動への意欲をもつようになった。

これらが相互に作用しながら、一人一人の児童が変容してきた。「こんな学級にしたい」「みんなで何かやろう」といった個々の意識の高まりは学級をよくしていこうという主体的な活動を生み、自分たちで学級活動を創っていこうという力となってきた。

(2) 課題

アンケート結果からも分かるように、「意見を言えない」「友達のよさを見付けられない」と感じている児童もいる。今後は、話合い活動だけでなく、学級活動の様々な場面で、児童同士の認め合いや教師の適切な助言を積み重ね、より多くの児童が自信をもって学級活動に参加できるような工夫をしていきたい。

また、学級活動における児童の意識の高まりの要因など、さらなる分析を深めながら、今後の活動に生かしていきたい。

Ⅴ　研究の成果と今後の課題

本部会では「望ましい集団活動を通して、豊かな学校生活を創造する子どもの育成～評価の工夫と活用を通して～」を研究主題とし、低学年、中学年、高学年の３分科会に分かれて、学級活動に主眼をおき研究を進めてきた。ここでは、各分科会の手だてを基に「教師の適切な指導・助言」と「児童相互の認め合い（かかわり合い）」に分け、本研究の成果と課題として以下のようにまとめた。

１　研究の成果

(1) 教師の適切な指導・助言

児童一人一人が「目指す児童像」に近付いていくための指導・助言を教師が的確に行うために、評価規準に基づいた具体的な児童の姿を分科会ごとにまとめた。また、毎時間の活動において、評価の重点を設定したり、一人一人の児童の実態や目標を具体化したりした。

これらの手だてにより、多くの児童のよさを見落とさずに評価し、的確な指導・助言を行うことができた。このことは、指導・助言を受けた特定の児童だけでなく、学級の児童がより多くの友達のよさを発見する力を付けることにもつながった。

(2) 児童相互の認め合い（かかわり合い）

低、中、高それぞれの分科会で、友達のよさを発見し、交流する場を設定した。カードに記入するだけでなく、よかったところを口頭で発表し合う場、カードを掲示し、それを見合う場なども設定した。これにより、発見したよさが学級全体に広がり、多くの児童が認め合い、自信をもつことができるようになった。

また、カードの内容を記入したり発表したりする時間帯なども、分科会ごとに児童の実態を考えて工夫した。このような工夫により自ら進んで友達のよさを発見し、それを自分の活動に生かすことのできる児童が増えた。

以上のような成果により、児童の学級活動に対する積極的な姿勢が育ち、本研究の主題である「豊かな学校生活を創造する子どもの育成」に迫ることができた。

２　今後の課題

(1) 毎時間の授業の中で、より効率的に児童の実態をとらえ、記録しながら、一人一人に対し、より適切な評価をできるようにしていきたい。

(2) さらに多くの児童が、認め合いを学級活動に生かしていくことができるように、学級の実態や児童の発達段階に応じた認め合いの工夫をしていくと同時に、学級活動で培った社会性や人間性を学級活動以外の集団活動にも生かすことで、豊かな学校生活を創造する子どもを育成していきたい。

平成１５年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成１５年度　　第３１号

平成１６年1月２１日

編集・発行　　東京都教職員研修センター
所在地　　東京都目黒区目黒１－１－１４
電話番号　０３－５４３４－１９７６

印刷会社名　　勝田印刷株式会社